

今回は、安政四年(一八五七年)の松浦武四郎の記録から、「シキウシバ」荷物背負場について検討する。武四郎は、「再篠石狩日誌」でシキウシバを次のように記述した。「シキウシバ」此處大岩峨々と両方より突出する間滝に成たり。シキウシバとは、荷物背負場と云事也。惣名是より上をカモイコタンと云。

カモイコタンは激流のために丸木舟で上ることができないのでこのシキウシバに丸木舟を陸揚げして、荷物を背負い、陸路ハルシナイまで約三キロ前を歩行し、ハルシナイから別の丸木舟に乗り、上川に入るのが通例であった。その丸木舟から荷物を陸揚げし、荷物を背負う所が、シキウシバであった。

松浦武四郎が書いたシキウシバ

旭川のアイヌ語地名研究

(47)

高橋 基



「野帳」のシキウシバ



【現・神居古潭】

一 旭川のカムイコタン④

「背負場」の位置はどこだったのか。武四郎は、ダイジエスト版の『石狩日誌』で、次のように記述している。

「辛うじて神処のシキウシバといふに着す。此處アイヌ等皆荷物を上乗り來りし船を繫置処也。故に此名あり。又向岸にシユマチセとて岩窟有。」

シユマチセ(suma-cise)岩・家は、前号で紹介した、掲載図のシラッセ(sirat-cise)岩・家)。シユマチセである。従つて、シキウシバは、シ

は、シケウシ(sike-us-i)荷物を背負い、つけている所)に、和語の「場」が付いた合成語のようである。例えば、石狩市の矢臼場が、ヤウン(ya-us)-i網が・沢山ある・所→鮭捕獲用の網が沢山かけられている所)に、和語の「場」が付いた合成語の可能性が高い。「上川には寛政初期から交易用の「場所」が開設され、松浦武四郎より五十年早く上川を踏査した近藤重蔵は、これまでにも紹介したように、比布と忠別の二カ所の番屋に宿泊し、その上、忠別川上流に三カ所の番屋を往来していく、「シキウシバ」荷物背負場が定着していた可能性がある。いずれにしても、シキウシバについて、今後の研究を待ちたい。

さて、それでは、「シキウシバ」荷物を往来していく、「シキウシバ」荷物背負場が定着していた可能性がある。いずれにしても、シキウシバについて、今後の研究を待ちたい。



明治44年の神居古潭

があると明記している。

ところが、前記の「再篠石狩日誌」で、神居大橋の岩場の上流になつていて、すなわち、「(シキウシバから)しば

ホロレフシへは、ポロレップシペ(po-ro-rep-us-pe)大きい・沖・についている・者)岩)で、掲載図の★印のよう、位置は明確である。従つて、武四郎の右の記述に信をおくなれば、シキウシバは、この大岩から凡二丁(註一約二二八メートル)下流の左岸といふことになる。明治四四年の神居古潭の写真(北大図書館蔵)の吊り橋の上流左岸の入り江状の付近である。

掲載の「野帳」のシキウシバは、この調査に持参したフィールドノート(『已第二番』)のシキウシバのスケッチで、中央の川中の大岩がポロレップシペで、絵の右側(左岸)が、シキウシバである。この図からも、シキウシバは、神居大橋の上流左岸であるようである。(アイヌ語地名研究会幹事)